新説 魔法少女まどか マギカ 本紀

銀河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新説 魔法少女まどか マギカ 本紀

【Nコード】

N2333T

【作者名】

銀河

【あらすじ】

「魔法少女まどか マギカ」を私物化した長編です。

帰ってきた少女

午前九時、東京駅一〇番線に神戸からの夜行急行列車が到着した。一等寝台車から、一人の少女がホームに降り立つ。濡れるような長い黒髪、男達の目を引かずにはいられない美少女。薄紫色のセーラー服、大きめの革製トランクを軽々と持っていた。

少女は憂いを帯びたような表情で、改札口へ向かう階段を降りた。すれ違うビジネスマンも、思わず視線で追ってしまう。

少女の後を歩いていた灰色スーツの男が二人、階段を下りて通路を左に曲がった少女と同じ方向へ向かった。

しかし、広い通路に少女の姿はない。

思わず足の止まってしまった二人に、後ろから声がした。

「あなたたちのボスにあれば忠告したのに」

振り返ると、前を歩いているはずのターゲットがそこにいた。

「何の話かな、お嬢さん」

二人のうち、年長らしき男が冷静さを保って言った。

「私を尾行しても意味はない。部下の命を粗末にするべきではない、と」

若いほうの男が反射的に懐に手を入れたが、年長の男が手を差し出して制した。

「場所をわきまえろ！」

通路を親子連れの行楽客やビジネスマンが慌ただしく通り過ぎる。

その一瞬の間に、ターゲットの姿は消えていた。

応接室の柱時計、午前十時を告げるウズボン打ちが、心なしか間延びして聞こえる。

ママは長手椅子に深く座り、淡々と言った。

「社長さん、私は、すでにかなり譲歩していると思いますよ」

紺のスーツ、背中を丸め、ひたすら赤い絨毯に這いつくばる男に、

日本を代表する大企業の社長という肩書きは、もはや想像すらできなかった。しかも男が平伏する相手は、どう見ても二十歳には満たない、少女なのだ。

「はいっ、それは、もう重々承知しております。その点マミ様には深く深く感謝しておりますが、何卒、何卒、さらなる額の上乗せを、どうか、どうか、お願いいたします」

ふう、とマミは息を吐いた。

「できない、と言ったら？」

「それは…その、マミ様の名声にも傷がつくかと…」
「どうして？」

「この、国家の大事業の失敗、その責任が…」

「私にある、とでも？」

「いいいえ、ととんでもない！ それはもう、私どもの見通しの甘さが原因でして…ただ、今ここで十分な資金さえあれば、なんとかなるわけですし、その、マミ様が私どもを見放した、と受け止められる、ということは、その…」

マミの眉が少し動いた。

「それは、この私を脅迫しているのかしら」

顔から脂汗が滴り落ちる、という状況を絵に描くなら、格好のモデルになつたらう。

「いいいえ、ととんでもない…」

「誰に相談しても私は構わないわ。すでに、バママはむしろ寛容にすぎる、と思われていることでしょう。そっちのほうが迷惑なくらい」

返す言葉に詰まる男に、マミは今度こそため息をついた。そして、脇に控える蒔田を見上げた。

「蒔田、お客様がお帰りよ」

「はい、お嬢様」

すらっとした長身、白髪之交じる執事は音もなく男の脇に移動した。

一旦顔を上げた男は、慌てて床に鼻を擦りつけた。

「マ、マミ様、どうか、どうか私を見捨てないでくださいっ…お、
お願いですっ…」

マミはすくつと立ち上がった。

「これは、あなた個人の問題じゃないわ。帰って会長さんに伝えて
ください。お父上との誼でお話はうかがったけれど、巴マミは不愉快
だった、と」

招かざる客が消えて、マミはマホガニーの執務机に戻った。

応接セットをサッと払った時田は、機敏に背筋を伸ばし、マミ
の指示を待った。

「少し遅れたけど、お茶を…」

マミは言いかけて、ふつと笑みを漏らした。

「…お客様が来るわ。用意して」

「かしこまりました」

つづく

七十七年ぶりの来訪者

「相変わらずね、マミ」

黒髪の美少女は応接椅子に座っていた。

ドアすら開けず、突如その場に現れた訪問客にもマミは驚かなかつた。

「あなたこそ。下まで歩いてきたのなら、普通に入ってきてもいいでしょう」

「エレベーターが混んでいたから」

平然という黒髪の美少女。

「ほんと、久しぶりだわね、ほむら。何年ぶりかしら」

「直接顔を合わせたのは、東京駅午後九時、急行五列車下関行、以来だから七十七年ぶりかしら」

マミはしばし記憶をたどった。

「…そんなになるかしら？」

「ええ」

「でも、その格好は何？」

ほむらは、薄紫色の古風なセーラー服を着ていた。

「伊藤公が下さった服よ。女学校の制服にしようとされてたそうだけど、結局お蔵入り」

「…私は初めて見るわ」

「そうかもしれないわね」

「今見ても素敵な服よ」

「ええ。私も気に入っているの。これだけはずっと持ち歩いてきた」
「積もる話もあるけど…」

その時、蒔田がお盆に紅茶を載せて戻ってきた。突然の来客にも動じはしない。

そっとお盆をテーブルに下ろし、蒔田は腰を折った。

「曉美さま、本当にお久しぶりでございます」

ほむらは初めて笑みを見せた。

「ええ、蒔田さんとはパリ以来？」

「さようでございますな」

「お話の途中で悪いんだけど、蒔田、そういうわけで今夜以降の予定はいったん全てキャンセルよ」

「ママがそう言うのと、蒔田はぴしっと姿勢を正した。

「かしこまりました。すぐ手配いたします」

蒔田は素早く奥に引っ込んだ。

「ごめんなさい。予定のキャンセルが結構あるのよ」

「こちらこそごめんなさい。事前に連絡しようかと思っただけで、蠅がモスクワからずっと付いて来たのよ」

「ロシアにいたの？」

「いえ、シベリア鉄道経由で来たから」

「わざわざ地上を？」

「ええ。せつかくだから昔の逆コースを」

くすつとママは笑った。

「あなたがそんなことを考えるなんて、意外だわ」

「そう？ この地上の広さを決して忘れてたりしないように、時々はね」

ママの顔からすつと笑みが消えた。

「今日、あなたが来なくても、そろそろ連絡しようかとは思っていたの」

ほむらは小さくうなづいた。

「見つかっていないんでしょう？」

「ママは深くうなづいた。

「八方手は尽くしているんだけど」

「八十年後、東京…情報が少なすぎる」

そう言っつて、ほむらは遠くに視線をやった。

「東京は広いわ。市域拡大以前の東京市の範囲内と限定するわけにもいかないし」

「ママはそう言うと、机の引き出しから広域地図を取り出した。

「特別区三十六区、その周辺、と考えて、横浜、相模原、多摩、所沢、大宮、船橋、浦安あたりまでは範囲に入れているのよ」

「ほむらも立ち上がって地図を見た。」

「この範囲を私たち自身が調べる、と言っても、いったい何年かかるかわからないわね」

「ママは椅子の背もたれに体重をかけた。」

「まどか、という名前の女の子は一人残らず全員調べたわ」

「ほむらはふっと息を漏らした。」

「名前がまどか、とは限らないでしょ」

「もちろん。でも、一応はね。漢字で『まどか』と読めそうな名前も全部調べたわよ」

「ほむらは椅子に腰を下ろし、紅茶を口にした。」

「そういえば、さやかはどうしてる？」

「ママは地図を折りたたんで、引き出しにしまった。」

「中学生よ、普通の」

つづく

七十七年ぶりの来訪者（後書き）

（注）東京三十六区

昭和二十一年再編される以前の三十五区に練馬区を加えたもの

走る、さやか

初夏の陽気。木々の緑が眩しい。

川沿いの道を下校途中の女子中学生が二人、歩いていた。

衣替えはまだだから冬のセーラー服だが、今日ばかりは夏服に着替えたいくらいだ。

「ねえねえ、さやか」

「なに？」

「これから、ちょっと付き合ってくれない？」

友人の頼み顔に、さやかは一瞬考えた。

「そうね。一時間くらいなら。でも何？」

「あのね……」

さやかが立ち止まってしまい、友人は先に数歩歩いてしまった。

「え？ どうしたの？」

さやかは正面を凝視している。

「ごめん、急用ができた」

そう言つとさやかは走りだした。

「え？ ちょっと、さやか？」

あつという間に姿は見えなくなった。

「…あんなに、足、速かつたっけ？」

さやかは、二キロ先の橋まで走つた。

まず目に入ったのが目の覚めるような青いチャイナドレスを着た黒髪の少女。

「ほむらちゃん！」

「久しぶりね、さやか」

欄干にもたれかかっていたほむらに抱きついてしまう。

「久しぶり、本当に久しぶりだよ！」

目には涙さえ浮かんでいる。

「ええ、本当に。ごぶさたしてごめんね」

「感動の再会のところ申し訳ないんだけど…」

「ママが冷静に言った。」

「ママさんも久しぶりです」

「美樹さん、あなた、私たちに気がついてからここまで、何秒で走ったか、自覚してる？」

いきなり言われてとっさに考えがまとまらない

「え、ええと…それが何か」

「軽く女子百メートルの世界記録を上回っていたわよ。陸上選手にでも見られたら、どうするつもりだったの？」

「さやかは口に手をやり、それからへなへなと下ろした。」

「ご、ごめんなさい」

「きつく言わなくてもいいじゃない。それらしい人間はいないようだし」

「ほむらが道を見渡す。」

「今回はたまたま運がよかっただけよ」

「そうですね。ママさんの言うとおりです。反省してます」

しゅんとするさやかに、ほむらも思わず笑みがこぼれた。

「だけど、さやかは本当に中学生なのね」

「うん。私は、結局こういう生き方が一番好きで…」

「でも、私が日本に帰ってきた、ってことの意味、わかってるわね」

「さやかも真剣な表情になった。」

「まどか、でしょ？」

「そう。そろそろよ」

「さやかは黙ってうなづいた。それから、はっと思い出したように二人を見た。」

「杏子は？」

「ママもほむらも複雑な表情を浮かべた。」

「さあ、彼女のこととはわからない」

「ママがつぶやくように言った。」

マミの住居は東京駅正面、丸ビルの中にあつた。大正十二年竣工、地上九階、地下二階の近代的オフィスビルは、国の重要文化財に指定されている。マミの部屋はその八階、駅に面した側にあつた。

執務室は赤い絨毯のひかれた洋室だが、その隣の居間は畳敷きであつた。そこに丸く大きなちゃぶ台が置いてある。

三人はそこに座つて急須のお茶を飲む。マミの前に置かれたノートパソコンが場違いにも感じられる。

「さて、さつそくだけど、美樹さんには明後日あたりからここに寝泊りしてもらいます」

マミがきつぱりと言つた。

「はい、わかりました」

さやかは冷静を装つて答えた。

「突然のようだけど、私たちにはあまり時間がない。わかっているわね」

うなづく、さやかとほむら。

「当面、私はあまり外出できないから、外のことは二人に任せるけど、表を美樹さん、裏をほむら、ということでもいいわね」

さやかがおずおずと口を開いた。

「あの、表つて、何をするんですか？」

「そうね。さしあたり高野山に行つてきてもらうわ」

「高野山？」

「そう」

「一人で？」

「そうよ」

「そんな」

「ねえ、美樹さん、あなたも、あなたなりに調べてきたんですよ」
「それはもちろん」

「鹿目さんが男の子かもしれないということ、頭に入っていた？」

さやかはあまりのことに絶句した。

「ママはふうと息を吐いた。

「それじゃ、あなたは鹿目さんに会っても、見逃していたことになるわね」

「そ、そんなことはありません！ まどかに会って、わからないはずがありません！」

力説するさやか。ほむらは静かにお茶を飲んで、茶碗を下ろした。「そうとも限らないわよ。最初から男の子を考えに入れていなかったら、もしも男の子だった場合、見落とす可能性が大きいでしょうね」

「そういうこと。うかつだったわね」

さやかは、まさかという思いと、しまったという思いが交錯してうつつむいてしまった。

「ひょっとして、という男の子はいない？」

「ママの問いにさやかは二回首を横に振った。

「そう。それじゃ、その罰ゲーム、というわけじゃないけど、高野山には一人で行ってもらいます」

「罰ゲームではない、と言いなながら、罰ゲームそのものだ、とさやかは思う。

「ママはノートパソコンを開いて、猛烈な勢いで何か打ち込んだ。

そして、メモ用紙に数字を書き込んだ。

「じゃ、これを持って一階のツーリスト・ビューローに行って、切符を受け取ったら出発してちょうだい」

「切符？ 出発って、今からですか？ 列車で？」

「驚くさやかに、ママは平然と言った。

「ええ。私とほむらは、すでにあちこちに面が割れている。その点あなたはナチスでさえノーマークだったんだから、その戦力は可能な限り温存しておきたい。だから、ここはおとなしく列車で行ってきてちょうだい」

「ママは、でん、と百万円の札束をさやかの目の前に置いた。

「切符の代金は支払い済みだけど、いろいろあるでしょうから、と

りあえずそれを持って行つて。あなたの自由に使つていいわ」

さやかは、これまで、そんな大金にはまったく縁がなかった。

「あ、あの、こんな大金……」

「私たちは普通の人間とは違うけれど、この社会で生きていくにはお金が必要。それは全て私が準備する。気にすることはないわ」

マミは腕時計を見た。

「急がないと時間がないわよ」

さやかは、まだ自分がセーラー服を着ていることに気がついた。

「あ、あの、服着替えたいし、だけど着替えなんか一着もないし……」

「かまわないわ。そのまま行つてきて。むしろそのほうが喜ぶかも」

マミは含み笑いを浮かべた。

「急いで！」

「は、はいっ！」

さやかは慌ただしくマミの部屋を出て、エレベーターホールへと走った。

東京駅午後十一時発、急行七列車博多行

さやかが慌ただしく出発した後、マミとほむらはしばらく黙っていた。

「お茶、もう一杯いかが？」

マミが急須を差し出す。

「ありがとう」

こぼこぼと音を立てて茶碗に注がれる。その様子をほむらはじっと見ていた。

「ふふ…忘れていたわ。自分が日本人だったことに」

「そう？」

「ええ。もっと早く日本に帰ってくるべきだったかもしれない」

「ナチスの残党が自然にいなくなるまで六十年かかった。あなたは、本当によくやったわよ」

ほむらはゆっくりとお茶を味わった。

「そう言ってもらえると、ありがたいけど、でも、私だけの仕事でもないわ」

マミはそれには答えず、静かに言った。

「本当はね、少しゆっくりしてもらいたいところなんだけど、それも言っていられないのよ」

ほむらはうなづいた。

「ええ。明日からでも、目星つけてるところから片付ける」

マミはくすつと笑った。

「合衆国大使館、今頃大騒ぎでしょうね」

人事のように言うマミに、ほむらは少し厳しい視線を向けた。

「さやかにあんなこと言ったけど、マークされたわよ」

「当然でしょう。隠し通すことなんてできはしないわ」

「私が少し派手にやって、目を引くのはいいとして、あの子に何をやらせるつもり？」

「ふふ…さしあたりは真魚様の心をくすぐることかしら。いたいけな女子中学生の姿で」

ほむらは、まさか、と手を広げた。

「せめて、今の里親との別れくらい、ちゃんと…」

マミの目に鋭い光が走った。

「わかっているはずよ、美樹さんも。いつまでも中学生ではいられない、ということを」

ほむらは、お茶を飲み干した。

「それで？ さやかをあんなに急がせたのはなぜ？」

マミはほむらのほうを見て、にっこり笑った。

「明日の朝、ニュースになるでしょうね」

旅行会社で切符を受け取り、駅へと向かうさやか。すでに夜も更けて、帰宅する通勤客の姿もまばらだった。一番近い丸の内南口改札に向かったさやかは、改札口の駅員に切符を差し出す。

「…あ、お客様、これはこちらではなく、中央口にお回りください。そう言われて、中央口に向かうと、駅員と赤帽が待機していた。」

「貴賓車のお客様ですね」

さやかに向かって駅員が言った。

「あ、いえ、違います」

さやかは持つていた切符を見せた。

「これは貴賓席の切符ですよ。先ほど南口から連絡がありました。慌てて切符を見ると、たしかに貴賓席と書いてある。」

促されるままに貴賓席待合室に入ると、恰幅のある紳士が一人、奇異の表情を向けた。駅員が去ってしまうと、紳士とさやかの二人になってしまった。

さやかはしかたなく、端のソファに腰を下ろした。

（マミさん、なんで貴賓席なんか…）

「お嬢ちゃん、どちらまで？」

紳士が語りかけてきた。このような場所に、セーラー服に通学靴

という出で立ちでは、興味を抱かれてもしかたあるまい。

「あ、ええと、大阪まで」

「大阪まで一人？」

「そうです」

「ご両親のところに戻るのかな？」

「ま、まあ、そんなものです」

警戒するさやかに、男は額の汗を手で拭った。

「ああいや、貴賓席に中学生が一人、というのも珍しいものだから、ついね。申し訳ない」

何やら男の息が荒い。

「私はね、こういう者なんだが」

手を伸ばして名刺を差し出す。

「あの、私は……」

「ははは、中学生が名刺を持つてるわけないさ」

脂ぎった手から名刺を受け取ると、衆議院議員、近道夢大とあった。

「代議士さん、なんですか？」

わざとらしい言葉を繰り出して見たが、近道代議士は全然気がついていないようだった。

「ああ、そうなんだよ」

立ち上がって、どすんとさやかの隣に座った。想像したくもないことだが、代議士のズボンがこんもり盛り上がっている。さやかは、冷静に防犯カメラの位置を確認した。

「いやあ、かわいいねえ」

その時、駅員が入ってきた。

「お待たせしました。ご案内いたします」

さやかが何事もなかったようにすくつと立ちあがった。代議士も悪びれたようすもなく立ち上がった。

博多行夜行急行列車の前方、二等車、三等車はそれなりに乗客で

賑わっていたが、最後部の貴賓車は別世界だった。幸いと言うべきか、鉄道ファンの姿もなく、近道代議士、さやかの順で車内に入った。個室のドアを閉めてしまえば、代議士と顔を合わせることもない。車掌室があるしボーイも控えているから、代議士も、よもやおかしな行動はできまい。

ボーイが注文を取りに来たので、サンドイッチとコーヒーを頼んだ。食堂車に行くほどお腹はすいていない。備え付けの浴衣に着替えて、ベッドにごろんと横になった。

夕方までごく普通の中学生だったのに、今や夜行急行列車の貴賓室の客。さやかはその急変ぶりに、思わず笑いがこみ上げてきた。そして、二年間一緒に暮らしながら、何の準備もなく別れてしまったお母さんお父さんのことを思った。すでにさやかの記憶は失われ、亡くなった我が子のことが蘇っていることだろう。

カーテンの向こうからベルの音が聞こえてきて、列車は静かに発車した。

復活のさやか

ドアがノックされた。

『おはようございます。まもなく大阪に到着いたします』
ボーイが起こしにくる前に、さやかは目が覚めていた。

「はい、ありがとうございます」

午前五時すぎ、カーテンを開けると、列車は広大な操車場の脇を走っていた。

さやかは室内の洗面所で顔を洗った。気色悪い代議士のことが気にはなつたが、特に何事もなく、ぐっすり眠れた。

淀川の鉄橋を渡り、列車は定刻五時三〇分、大阪駅に到着した。

さやかはボーイと車掌の敬礼を受けてホームに降り立った。

旅行会社で添付してくれた乗り換え案内図によると、西成・城東線の内回りに乗り換え新今宮に出て、そこから南海鉄道の特急こくや号に乗り継ぐことになっている。しかし、こくや号の切符を見ると、しつかり、特別車であった。

さやかは、古い記憶をたどりながら、地下鉄の梅田駅に向かった。十二両編成対応、天井の高い広大なホームに、一両の電車がちょこんと停まっていた梅田駅は、天井も低い普通の地下鉄駅になっていた。そこから十両編成に成長した電車に乗り、難波へ出た。ふと思いついて地上へ出てみると、南海鉄道難波駅手前の高島屋百貨店は、昔と同じ威容を誇っていた。

「気をつけなさい、さやか」

ささやくような男の声がしたかと思うと、景色が消えた。漆黒の闇の中にあるように錯覚するが、自分の体はちゃんと見えている。

「いやあー、かわいいねええー」

間延びした声の主が誰か、聞き違えるはずもなかった。さやかは

ふう、とため息をついた。

ずももも、という気持ちの悪い地響き音がして、黒く、ぬめぬめした男の形が盛り上がってきた。

さやかとしては、そんな物見たくもなかったが、いたしかたない。

「かわいいねえー」

聞くだけでも吐気を催す声、鼻を突く異臭を漏らして、男の形は突進してきた。

さやかはひらりと身をかわして、背後に打撃を入れた、つもりだったが、表面のぬめりに滑って、有効打とはならなかった。拳に、強烈な異臭を放つ粘着く液体がごびり付く。

しかたなく、さやかは剣を現出させた。必要な鉄は、夜の内にレールからわずかづつ回収して、鞆の底に貯めてあったのだ。だから現出させるのも非常に速い。

剣を構えたものの、男の形はそんなものなど意にも介さず、いや、気がついてもおらず、ただ本能のままにさやかに向かってくる。

一刀両断。

「ぶももも…」

声とも悲鳴ともつかぬ耳障りな音を響かせて、さやかの足元にぐちゃっと落ちた。

濁った白い液体を全身に被った。もはや嗅覚は麻痺しそうだった。

「あーあ…」

諦めそのものの虚脱感が全身を襲った瞬間、正面から柑橘系の心地良い香りの風が吹いてきて、体中の気持ち悪いねちゃつきも消え去った。

さあつと風景が戻ってきて、高島屋百貨店の姿が目に入った。

正面に、クリーム色の洒落たジャケットを着た青年が立っていた。

「お疲れ様、さやかちゃん」

「…真魚様！」

ほむらは、朝食後シャワーを浴びて、バスローブを羽織り、居間の和室に戻ってくると、執務室でマミがテレビの前で電話しているのが見えた。

「…ええ、ありがとう。本部長によろしくお伝えください」

マミは受話器を置いた。

「何かあったの？」

「ええ」

マミはテレビへ視線を向けた。

レポーターが雑踏の中でしゃべっていた。

「…この影響で、列車は姫路駅を約一時間遅れて出発しました。以上、姫路駅前からでした」

朝のワイドショー、スタジオが映る。男性キャスターは笑いともつかぬ変な顔をしていた。

「はい、姫路駅前から中継でした。しかし、警察の発表は病死、過去に心筋梗塞で倒れた病歴があるので、今回もそうではないか、ということでしたが…」

背広姿の解説者も笑いを含んでいた。

「まあ、ネットでは男性特有の、強烈な体液の臭いが漂っていた、という情報が流れてまして、警察も、浴衣が汚れていたのは認めましたけれどもね…たぶん、事件性がない、というのは事実なんですよ」

男性キャスターは苦笑していた。

「まあ、その、励んでしまったために心筋梗塞を起こした、ということも考えられるのでは？」

スタジオ内が押し殺した笑いに包まれる。

ほむらは露骨に顔をしかめた。

「何？ この下品なニュースは」

「列車内で代議士が亡くなったのよ。大量の『男性特有の体液』にまみれて」

そう言っつてマミはテレビを消した。

「美樹さんも乗った列車の中でね」

ほむらは両手を腰に当てた。

「姪獣ね」

「ええ。規模としては全然大したことないけれど」

「そうなることを知っつて、さやかを列車に乗せたわけ？」

「もちろんよ。亡くなったのは近道夢大つて代議士だけど、彼、結構こまめにブログを更新しててね、あの列車に乗るつて書いてたものだから」

マミは悪びれもせず言う。

「その近道とかつて男、淫獣傾向が大きいのを知つてたのね」

「衆議院議員の中では突出していたわ。今までも大きく報道されていないだけで、いろいろトラブルを抱えてたから、美樹さんが同じ列車に乗れば、まず確実に、ね」

はあつ、とほむらは息をついた。

「それで？ 力を使わざるを得なくなつたさやかの、後のケアは真魚様がやつてくださると」

「そういうこと。とっさに思いついたわりには、なかなかうまくいったでしょ」

ほむらは居間のハンガーにかけてあつた服を取つた。

「これで、さやかは世界にデビューしてしまつたわよ」

「さあ、どうかしら。今のところ世界の目は、ほむら、あなたに向いてるから」

ほむらは青いチャイナドレスを身につけた。

「それはそうと、あなたがチャイナドレスを着るなんて、ちょっと意外な気がするんだけど」

ほむらはかがんで、裾を少し持ち上げた。

「これはね、宋慶齡夫人からいただいた戦闘服なの」

「戦闘服？」

「そうよ」

ぱつと足を広げる。

「一見足回りが不自由に見えるでしょうけど、ほとんど重さも感じさせず、抵抗なく自然に足にまとわりついてくる。一度これを着たら、普通のスカートでは戦えない」

そう言っつて、ほむらは、マミの古風な服装を指さした。

「あなたの、その服装にもいわれがありそうじゃない」

古めかしいデザインの白いブラウスに、これまた古典的な紺のスカート。

「ああ、これは、吉田総理から、マツカーサーに会うなら、つて勧められて、焼け残っていた神田の洋装店で仕立ててもらったもの。

今時、こんな手縫いの贅沢品、なかなか手に入らないものくすつとほむらは笑った。

「お互い、古いわね」

「ふふ…昔のあなたなら、無愛想に黙っていたのに、ずいぶん丸くなったじゃない」

ほむらは長い黒髪を後ろにはねた。

「人は変わるのよ。その時間は充分すぎるほどあったわ」

「確かにそうね。そうよ…遠い昔の話だわ…」

マミは視線を遠くにやった。

「見滝原の制服でも着る？」

「あるの？」

「ないわ」

「…そうでしょうね」

マミは目を閉じた。

「また着たいわね。鹿目さんも一緒に、四人で」

復活のさやか（後書き）

（注）大阪市営地下鉄御堂筋線梅田駅

さやかは難波へ行くため、中百舌方面のホームに出たので普通の地下鉄駅のように感じたわけですが、江坂方面のホームに出ているら、かつて見た雰囲気が残っていたわけです。

必ず誰かが体験することになる立場

さやかは、特急こうや号に乗ることはなかった。

高島屋百貨店前にいたかと思つたら、次の瞬間には高野山の禁足地にいたからだ。都市の真ん中から一瞬にして深淵の森の中。空気の匂いが突然変わって、鼻が痺れるような感触。太陽光のコンクリートからの照り返しがなくなって、充分明るいはずなのに、薄暗く感じる。

かつて一度だけ訪れたことのある庵は、さやかの記憶にある、昔の佇まいそのままであった。促されるままに中に入ると、室内はさやかの予想を完全に裏切っていた。

漆喰の壁には西洋画のカレンダーがかかっているし、丸太削り出し座机の上には、旧式であるもののプッシュホン電話機とノートパソコンが置いてある。ペン皿には鉛筆、ボールペン、消しゴム。天井から下がった照明は蛍光灯であった。

照明を見上げるさやかに、真魚様は自慢げに言った。

「ああ、それはね、つい先日LEDに換えたんだよ」

「…なんか、意外です」

「そうかな？ さやかちゃんが前回来たときは、まだ電気も来ていなかったからね」

「いえ、そういうことではなくて…」

「私が平安時代そのままの生活をしていないことが、そんなに違和感あるかな？」

「…そんなことは…だた、拍子抜けはしてます」

「実は前回だって、江戸時代や明治時代の図書や道具が置いてあったんだだけだね」

真魚様は座机の前に座った。

「さやかちゃん、そのセーラー服の下、下着は何をつけている？」

あまりに突拍子もない質問に、はっと真魚様を、見た。

「まさか、昔の下着じゃないだろ？」

「あ、あの…」

「マミとほむらは昔の服を大事に着ているが、下着まで昔のものではないはずだ。特に女性はね、今時の下着を一度身につけてしまうと、もう昔のものに戻ることもなんかできないんだよ。私も、似たようなものさ」

さやかも自分自身のことを振り返ってみて、確かに、今つけている下着のない生活など考えられないことに気がついた。

「…それで、洋服を着ていらっしやるんですか」

「まあね。女性ほどではないが、洋服は理になっっている、と私は思う」

さやかは、真魚様が座っているのに、つつ立ったまま見下ろしていたことに気がついて、慌てて畳の上に腰を下ろした。

「じ、ごめんなさい」

「ははは…気にすることはない」

真魚様は座布団を手にとって差し出した。

「あ、ありがとうございます」

座布団の上に丁寧に座るさやか。

「それにしても、マミも悪知恵にますます磨きがかかってきたな」

「悪知恵、ですか？」

「そうさ。目を付けていた淫獣化しそうな人間があの列車に乗ると知って、急遽さやかちゃんを同じ列車に乗せたんだから」

想像はついたが、やっぱりそうなのか、と思うと疲れがどつと出る。

「しかもだ、さやかちゃんを力を使わざるを得ない状況に追い込んで、後のフォローは私にさせようという…なかなか洒落た企みじゃないか」

「洒落てなんかいませんよ」

さやかは、ふうふう、と深く息を吐いた。

「朝食、まだだろっ？ ouchそうするよ」

そうなのだ。腕時計を見ると、まだ朝七時すぎだった。

真魚様は立ち上がった。襖の向こうへ行つて、すぐに戻ってきたその手にはお盆。かの有名な、毎日奥の院御廟に運ばれてくる食膳、に違いない。三方に、御飯一膳、ほうれん草とわかめの味噌汁、たくあん、小魚の煮付け。あらかじめ二人分用意してあるということ。は不思議だが、真魚様の前ではその程度のことには驚いてはいけない。「美味しい……」

さやかは素直に感動した。食材や調味料、調理法などを細かく分析してみてもしかたない。とにかく美味しいものは美味しいのだ。理屈などいらぬ。

箸を置き、心が和んだところで、真魚様は静かに切り出した。

「ところで、ママは私に、何を聞いてこい、と指示したのかな？」

「いえ、何も」

そうだ。用事も何も告げられず、ただ出発させられただけだった。

「なるほど。そのへんがママの怖いところだな」
などと言って真魚様は軽く笑った。

「なら私から質問だが、さやかちゃん、今の状況、どう思う？」
ママのことは深く突っ込むな、ということだろう。やむなく頭を切り替えた。

「……どう、とは？」

「そうだな、世の中の雰囲気、でもいい」

「少なくともこの国は、戦争も無くて落ち着いていると思います。でも、何か漠然とした不安があるんです」

ふむふむと二度うなずく真魚様。

「実地的確な意見だ。現時点で、切迫する特別に危険なことがあるようには思えない。地震とか台風などの天災は別にしてね。しかし、皆どうも安心できない。かつての戦争の時に比べれば、今見えていくつかの問題など充分克服可能のはずなんだが、なにか、克服できないという不安がある。克服できないこと、破綻することなど誰も望んではないのに」

「健康保険とか年金とか、経済も医療も、昔に比べたら断然進歩しているはずなのに、ですね」

真魚様はうなずいた。

「宇宙は、恐ろしいまでに平等だ。人間にとっての喜びや希望があれば、必ず悲しみと絶望が同じだけ存在する。片方に偏ることは決してない」

「はい。それはわかります」

「ただ、人間にとっては困ったことに、平等というのは宇宙全体の話だからね。個々人のレベル、あるいはある部分、たとえばある国、というような部分にのみ着目すると、どうしても偏り、時に両極端が生じることもあるわけだ」

「はい」

「そこで、君たち五人の体験を取り出してみると、そうしたバランスが一気かつ大幅に崩れないように、調整する役割を負わされたのだ、と言える。そのために、他の人々にはない特別の力を得た。いや、君たちの立場から言えば無理やり与えられたわけだ」

「…でも、ママさんは、それは私たちだけではない、と」

「そう、超能力少女の活躍するパターンもあれば、魔法少女の活躍するパターンもあり、超能力少年の活躍するパターンもあり、魔法少年の活躍するパターンもある。今この瞬間、というよりも、まさに同時存在として、世界の命運、宇宙の命運をかけて、死闘を繰り広げている少年、少女、年齢もさまざまな男、女、そのどちらでもない者、それこそ無数にいるんだよ。さやかちゃんには見えない、体験し得ない、干渉し得ないだけだね」

「そうした、無数のパターンの集まりが、この宇宙なんですね」

「そういうことだ」

真魚様はやおら立ち上がった。

「お茶を忘れていたな」

そう言っつて、再び襖の向こうへ行つた。急須とポットを持って戻つてきた姿は、あまりにも平凡というか、庶民的というか、話して

いる内容とはかけ離れているように感じられた。どこにでもあるようなプラスチック製のポットから、湯を急須に注ぎ、急須から茶碗に茶を注ぐ。煎茶には正しいいれかたというものがある。いくつかの家で教えられたから知っているが、そんなことはまるっきり無視だ。

ところが、手渡しされたお茶を一口含んでみると、信じられないほどに旨いのだ。

真魚様はにこにこ微笑んでいる。

見た目の形だけで判断してはいけない、ということなのだろう。

さやかは、茶碗を置いて、一呼吸入れて、言っておかなければならないことを切り出した。

「私は、ママさんやほむらちゃんとは違って、他の人にない力とか、使命とか、そういったものから距離を置いてきた……いえ、逃げていたんだと思います」

自分としては、思い切った言葉なのだが、真魚様は特別の反応も見せず、普通に応じた。

「ふむ。ママやほむらのように、持てる力を駆使して二つの帝国を滅ぼす、というのも一つの生き方だ。しかし、さやかちゃんのような生き方も、また一つの生き方だ。どちらが良いとか悪いとかはない。たとえば、見方によってはママは数百万人を殺した、とも言える。しかしそれは、産業革命以降の世界史の中における大日本帝国の精算、という意味では、犠牲は最小限だった、とも言えるんだ。実際、ママは本当に良くやったと思うよ」

「わかってます。ママさんがやらなければ、まどかはこの国を、いえ、人類をも滅亡させたかもしれないって」

「人類の滅亡とて、それはそれでパターンの中の一つのシーンなんだ。やっぱり良いも悪いもないのだよ。さやかちゃんが最悪と思うようなシーンも存在している。間違いなく存在している」

「私は、その、最悪の可能性を知っていながら、ママさんに全てを押し付けてしまったんです」

「マミは、押し付けられたなどはまったく思っていないだろう」「マミさん自身と私とでは、役割が違う、という話は何度もしてくれました。それは…私もわかっています。でも…」

「もう気がついていないとは思いますが、マミの立場も、さやかちゃんの立場も、一つのパターンの中では、必ず誰かが体験することになるんだよ」

さやかはうつむきかげんだった顔をキツと上げた。

「まどかも、そうなんですか？」

「まどかの立場も、誰かが体験せねばならないのか、という意味だね？」

「そうです」

「まどかは、一つの宇宙を生成し、また破壊するほどの、強大な力を得るに至った。それは、まどかの魂が人間という体験を卒業するところまで来た、ということなんだ。そういう卒業のしかたもある。一見、マミやほむらのほうが、人間とせずと進歩しているように思えるかもしれないが、人間としての進歩は関係がない。俗な言葉で大雑把に言うなら、人間の魂がただちに神に還る、ということなんだ。そして、それは幾度と無く繰り返し返されてきた。まどかを見守るさやかちゃんの立場で言うなら、必ず誰かが体験する二つの立場に、まどかと二人でそれぞれ体験している、ということだ。身も蓋もない言い方のように聞こえるかもしれないが、そういうことだ」「でもこのまま、まどかが人間を卒業したら、神に還ったら、この世界はどうなるんですか？ マミさんが、ほむらちゃんが、たくさんの人を犠牲にしてまで守ってきたこの世界は…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2333t/>

新説 魔法少女まどか マギカ 本紀

2011年5月29日13時55分発行